

## 完成人・村上あやさん

イプセンの名作「人形の家」で老医師は「自分が死んだらその空席はすぐ埋められ跡形もない」。今わの際で皆が抱く悲しみである。しかし、身内は別として、わが胸に生涯を通じて生き続けている人に恵まれることもまれにはある。私にとって村上あやさんはそのお一人である。

国際ソロプチミスト臼杵支部の皆さんが、村上さんの原稿を『くらし今昔』として発刊された。まえがきに、「世の男性の敬意を集め、女性にとつて心強い先達、すべての指導者としての『先生』と。『すべての』——何と的確、仰慕あふるる言葉か。

知・情・意のある一面で優れた人は多い。しかし、すべての面で完成した人はごくまれ。村上さんがまさにその人。

この度の著書は民俗資料館の古い生活用具たちに思いをこめて語っている。例えば冒頭の頁「こね鉢」について。

「緑がかった乳白色の分厚い陶器、竹でたがをしたのもある。女のやせ腕に力をこ

めて、こねたかがしのばれる。小麦粉に適当な塩水を加え、こんしん渾身の力をこめ、こねてこねてこね上げると弾力がでてくる。それにぬれ布巾ふきんをかぶせ適当な温度管理をし、適当な時間をかけ、はじめて小麦粉の本領が出てくる。人の子の教育と全く同じ」。

彼女は人の子への卓抜な教育者だった。天性の美質に恵まれながら、しかし、それ以上に自己をこねてこね続ける道半ばで交通事故で散華さんげされた。真の教育とは自己教育を生涯止めない者のみかなしうることである。

(一九九六年二月二十一日)